

横永剛志作 「信じるまでに」

効果音 (終業のチャイム。クラスのガヤ)

担任 それではこれで今日の授業を終わる。

生徒 A 起立。礼！

生徒 A おいおい、剛志さんよ、今日の授業の世界史、よく答えられたじゃん。

横永剛志 ああ、なんだ、あれか。旧約や新約聖書が何語で書かれたかってやつだろ？ へへへ、実はな、ちょっとそっちのほうの通信講座やってるんだ。

生徒 A なんだ、その“聖書講座”って？

剛志 聖書を分かりやすく解説したやつさ。この間からキリスト教の授業になっただろう。ふとしたきっかけで、聖書の通信講座があることを知ったんだ。授業に少しは役に立つぜ。

生徒 A ずる賢いやつ！ そばに置けないぜ。それでよオ、そこに出てくる神様っていうの、お前さんは信じてんのかい？

剛志 おめえもバカだなあ。あんなもん、信じられるはずないだろ。「人は罪びとです」だ？ いつおれが悪いことしたっていうのかよ。「神は愛です」？ だったらどうしておれの右の耳を聞こえなくしたんだ?! それなのに、何が「神は愛です」だ。

ナレーション ——と、こんな風に剛志君は思っていました。「この世に神なんかいるもんか! このおれが罪びとだ?! 冗談じゃない。」しかしある日、そんな彼の人生観を変えるような一つの出来事が起こりました。

効果音 (群衆のガヤ)

男 おい、ケンカだ ケンカだ！

剛志 おい、どうしたんだい、あの人だけりは？

生徒 B ああ、あれか？ なんでも日ごろ、…ほら、武田とかいうやつ、ちょっと生意気だったろ？ それであいつらがからかいに行ったんだ。そしたら武田、向きになったから…。

剛志 焼きを入れたってわけか。ひどいことするな。あいつら、5 人だろ？ 5 人で 1 人を袋だたきか。見ろよ、武田、血だらけだぜ。だれか止めに行ってもいいと思うけどな。

生徒 B ムリだよ。あいつら、その辺でも有名なツツパリ連中じゃん。巻き添え食うの、おれはごめんだよ。そういうお前こそどうなんだい？ 友達だろう？

剛志 ごめんだよ。わざわざ殴られに行くようなことはしたくないよ。それにしても武田のやつ、かわいそうに…。

ナレーション 翌日、学校全体でこの事件が問題になりました。あの五人組は、いろいろな言い訳を言っていました、そのうちの一人は——。

ツツパリA そりゃあ、武田にヤキ入れたのはおれたちだよ。でも悪いのはおれたちじゃねえ。このクラスのみなんだよ。あの時、なぜ止めに来なかったんだよ。そうすりゃあおれたちもワリイと思っただし、第一、こんなことに時間を費やさずに済んだのさ。そうだろう、クラスの偽善者さんたちよオ。

ナレーション “偽善者”。この言葉は剛志君の心に食い入りました。彼は武田君の友達だったからです。事件はその後、クラス全員が 1 日謹慎、あの五人組は停学で事は済みました。しかし、彼の心は痛みました。友達が殴られているのを見て見ぬふりをしていたのですから。

剛志(モノローグ) やっぱりおれはダメなんだなあ。あれから武田、おれと口を利かなくなりました。日ごろ親友ヅラしておいて、あんなときに助けてやれなかった。チキショー、おれはなんてダメなやつなんだ。これが、人間の“罪”というやつなのか？ だとしたら、一体おれはどうしたらいいんだ?! そうだ、この間、通信講座で紹介してもらった教会へ行ってみよう。神様なんてどうだっていい。ただ、人間にとって大切なものがそこにあるかもしれない。

ナレーション それから2週間後の土曜日、彼は教会を訪ねました。しかし、まだ教会というところに入ったことがありません。門の前でモジモジしていた彼は、ちょうどそこにいた一人の男の人に思い切って話しかけました。

剛志 あのを、ここが経堂めぐみ教会なんですか？

増田先生 ええ、そうですけど。何かご用ですか？

剛志 はい。通信講座でこの教会を紹介されて。どんなところか知りたかったのので来てみたんです。

増田先生 (喜んで)じゃあ、あなたが横永剛志君ですか？ そうですか、よく遠いところおいでくださいましたね。あ、申し遅れました。わたしが牧師の増田です。どうぞよろしく。

剛志 え？ いや、あの… こ、こちらのほうこそ、よろしく。

ナレーション それから彼の教会生活が始まりました。その教会は、若い人がほとんどで、その中に彼は心の安らぎを見つけました。“人と人との触れ合いの優しさ”、それが、すさんでいた彼の心を包んでくれたのでしょ。しかし――。

剛志(モノローグ) しかし、分からない。メッセージが分からない。聖書に書いてあることが分からない。周りにいる人は「今日のメッセージで勇気づけられた」と言うけど、おれはなんとも思わなかった。おれが罪びとだから、きっとまだ神様を信じていないからだろう。だけど、神様を信じるってなんだろう？ イエスってだれだ？ イエス・キリストの十字架ってなんだ?!

ナレーション 教会に行ってから3か月もの間、剛志君は考え続けました。そんなある日のこと――。

ツッパリA 剛志、ちょっと待てよ。てめえ、近ごろ付き合い悪いぜ。おれたちから離れて、自分だけいい子になって、成績上げたいと思ってるんだろ、ええ？

剛志 そんなこと、おれが考えてるとでも思ってるのか？ そんなセコいやつじゃねえよ。でもな、1回停学になったやつらと一緒にじゃ、おれの評判も悪くなるからな。半年前のこと、まだみんな忘れていないぜ。

ツッパリB 何?! よくも昔のことをまたヌケヌケと。てめえ、武田みたいになりてえらしいな。おオ、聞いたか？ 剛志が武田みたいになりたいとよ。みんな、やっちまおうぜ。

ツッパリC おもしれえ！ 久しぶりだぜ。

ナレーション 剛志君は、10人くらいの連中に囲まれて、袋だたきにされました。彼の近くにさっきまでいた友達も、今はどこにもいません。かかわり合いを恐れたのでしょ。殴られながら、体の痛みと共に、剛志君はなんとも言えない“むなしさ”を感じました。その時、変えは半年前のことを思い出しました。そうです、彼もあの時、かかわり合いを恐れて逃げてしまった中の一人だったのです。その週間、初めて彼は自分の罪深さを強く感じました。その日の剛志君の日記にはこう記されています――。

剛志 おれの中は、汚いものでいっぱいだ。今日は特にそう思わずにいられなかった。おれが殴られたのも、元はと言えばこのおれが悪いんだ。おれは、あいつらを心の中ではバカにしていた。“あんなワルをやって停学食らうのは当然、いい気味だ”と思ってさげすんでいた。し

かし、彼らに殴られて、おれは初めてあの時の武田の気持ちが分かった。友達を見捨てて自分の身の安全だけを考えたおれは、最低だ。彼らよりおれのほうが何倍も卑劣なんだ。武田、^{ゆる}赦してくれ！ なんだか殴られてスッキリした。でも、この心の中にある罪は、どうやったらスッキリさせることができるんだろう？ …そうだ、イエス・キリストを信じよう！ “キリストは、人間の罪を身代わりに背負って死んでくださった神様だ”と聖書に書いてある。この方を信じて心の重荷を下ろせたら…。神様、今までの悪いことを赦してください。

ナレーション 次の朝、彼の心の中は自分でも不思議なくらいにさわやかでした。あれほど痛い目に遭わされた彼らを心から赦すことができたのです。

ツッパリB 剛志、昨日はごめんよ。腕にケガしたんだってな？ もう平気かよ？

剛志 ああ、このとおり。ぴんぴんしてるよ。昨日のことなんか気にしないよ。

ナレーション 主イエス・キリストを信じた剛志君には、すべてのものが新しく見えました。何を見ても、うれしさにいっぱいになるのです。それだけではありません。今まであまり読むことがなかった聖書も、親しみ深いものとなり、牧師先生のメッセージも、よく分かるようになりました。礼拝後、先生に――。

増田先生 剛志君。君はもうイエス様を信じましたか？

剛志 はい、僕はイエス様が本当の神様だということが分かりました。神様を信じるということは、すばらしいことなんですね。毎日の生活がとても楽しくて…。今までに、こんな経験したことがありませんでした。

増田先生 そう、それはよかったね。

ナレーション こうして剛志君はイエス・キリストを救い主と信じ、自己中心の罪をイエス様の十字架で赦していただいただけでなく、神様を信じる最大の妨げとなっていたあの耳のハンディキャップも、信仰によって乗り越えることができたのです。

それから間もなく、彼は洗礼を受けました。1977年4月10日、イースターの日でした。その時の信仰告白を、皆さんもご一緒にお聞きください。

剛志 「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」(ヨハネの福音書 9:3) このイエス様の言葉は、僕にとって、神様と共に新しく生きる力となりました。僕は、右の耳が聞こえないために、どれほど多くの人を妬ましく思っていたでしょう。両親をどれだけ恨んだことでしょうか。でも、この言葉により、僕にはなぜ神が右の耳を聞こえなくしたかが分かったような気がします。神様は、こんな取るに足りない者をもお見捨てにならない。こんなに醜い、汚い心の者でも、イエス様は愛し、赦して下さる！ 神様を信じるようになった今、僕の右の耳は、神様の愛が一番示されているシンボルと変わりました。この喜びは、口で言い表すことはできません。イエス・キリストを信じた時に、この喜びは少しずつ、かつ確実に僕のところにやってきたのです――。

<完>